

獨樂寺は古來著名の大伽藍にして、明の王宏祚の修獨樂寺記には「是州也宮觀梵刹之雄、以獨樂寺稱、寺之雄、以大士閣稱、閣之雄、以菩薩像稱」と論じ觀音閣の内陣正面に乾隆御筆「普門香界」の額を掲げ、初層の正面に咸豐御筆の「具足圓成」の額を掲げてゐる。以て乾隆咸豐時代には寺運の隆盛なりしことを卜することができ。又「獨樂晨燈」は漁陽八景の中に數へられてゐる。以て如何に當寺

が古來著名の勝區であつたかを知ることができる。然るに惜むべきは近年寺廢せられ其僧房は小學校として用ひられ、遺存せる支那最古の貴重なる建造物は其大像と共に、何等保護の道が講ぜられず、次第に頽廢に赴きつゝあるのは惜むべきことである。

* 漁陽八景とは青池春漲 白澗秋澄 采樹煙霽 鐵嶺雲橫 盤山暮雨 獨樂晨燈 崆峒飛雪 瀑水流冰のことである。

芭蕉夜雨圖考

熊谷宣夫

(上段)

芭蕉夜雨圖は、既に名品綜覽二二二、國華三九六に紹介せられて

あるが、其の改幀せられた現在の狀態を茲に登載しうることを徒爾としない。猶ほ此の機會に調査的な報告を爲すことを諒されたいと思ふ。

(中段)

太白真玄敍及七言絶

叔英宗播七言絶

猷仲昌宣七言絶

山名時燦七言絶

關西梵章七言絶

惟肖得巖七言律

同右再書敍

謙岩原冲 惟忠通恕
五言絶 七言絶

鄂隱惠齋七言絶

(下段)

北海彦軾七言絶

梁需題及七言絶

玉晚梵芳五言律

西胤俊承七言絶

嚴中周噩五言律

曩にめぐりとして之に伴つて居た七家の題贊は大體に圖上の上段に貼られ、此圖の題贊は左記の如き順序を爲してゐる。

猷仲昌宣と同一紙にありし名不明の一行、山名時燦と同一紙にありし仲方圓伊敍及び七言絶は現在の装幀にも省かれてゐる。

紙繼ぎについては、上段各人別紙、中段梵章得巖間は明かにつぎ、以下一紙の如く見えるが、得巖の詩と再書敍の間も繼がれたものの疑を存し、下段は彦軾、梁需、梵芳以下各一紙である。

この序列は、云ふ迄もなくおそらく幾度かの修補を経て、何等諸家染筆の前後關係に發言すべきものではない。原始の形制の又如何なるものかも推しうるに不充分であり、或は現存の諸家の題贊の他に逸佚のものあらんとする推定も可能である。

唯、之にあつては、得巖、真玄、圓伊の三つの序を伴ひ、得巖、梁需の明かな年記（應永十七年に當る）を存するのは當時の詩軸間にあつても特異な例である。

今、一應諸家の題贊について略述したい。

太白真玄の敍及び詩には、上邊、更に右邊より數個處の斷爛が喰入つてゐる。右上隅に印文は缺けて不明であるが、遊印を存し、行數に於いては缺くる處なきを知る。序は大體その缺損を透して、一行十六字、七行に互り、詩は上邊二字を缺くものとして七言絶と認められる。

太白真玄に遺稿峨眉鴉臭集を存するが、此の文は四六駢驪の體と

原 寸

も思はれず、此集にも載する所でない。

署名に「河東」と冠するは、真玄に普通であり、溪陰小築圖、柴門新月圖に於ても同様、殊に後者にあつては、その印記又同文である。他人の之を冠するもの、惟忠通恕があり、柴門新月圖に於ける河東中吳があり、時代降つては古澗慈稽に見られる。此の「河東」が同一義であるとするならば、中吳の傳不明なるを除いて、他はいづれも建仁寺に住した事實よりしてその法社を意味するものであらうか。

方形白文朱印一顆、文に曰く「玉芝式枝」、之は溪陰小築圖に於けるものと同一と推せられる。瓢鮎圖、溪陰小築圖に見らるる方形朱文印「太白章」は之に見られない。

叔英宗播の遊印は篆刻の痕明かなものであるが、文の判讀に苦しむもの、江湖の御指教に俟ちたい。

「番易」と冠するは、他に笑巖法蘭の初秋送人圖に於けるものがある。後者は傳不明、纔かに峨眉鴉臭集中「閑笑岩住花藏師雲間人山門閣扁毘盧」(二八頁)なる山門疏を存するのみで、番易に就ては知る處ない。宗播

原 寸

にあつては同じく鴉臭集「送播叔英皈播陽叙」(九頁)に據れば

吾弟叔英上人、聞親疾病、將飯播陽、余出而送之門

と書出され、その生國は播磨と知られる。私案を以てすれば番易は播陽のつくりをとる號と思はれる。

方形白文朱印「叔英」、や、左邊を紙切れの爲缺くのを遺憾とする。瓢鮎圖にあつては「叔英圖書」なる方形白文朱印を用ひるが、共にその遺例乏しいものと云へやう。

猷中昌宣の詩、左上邊に蠹損あるも、おそらく三行に互り二十八字七言絶と推定せられる。傳を詳にしないが、鴉臭集に「寄東濃宣猷、仲碧雲之什後敘」(一一頁)あつてその人なるを知る。文中、

同心之友、惟肖岩公及僕、託思于日莫碧雲之句、或倡或和、前而角之、後而椅之、遂成近體二十篇、而惟肖既敘而詳焉、且命僕題卷尾

と見え、眞玄、得岩に伍した詩僧の一人たりし事明かである。この筆跡及び白文朱印「猷仲」はおそらく唯一の傳存と思はれる。

又、「海東」については雲壑猿吟に「次韻寄海東故人七言律」(一六

頁)或は「寄海東玄知客」(三八頁)の第一句に、

江東游子隔餘波

とあり、前の敘の東濃、此の江東或は江左は、まゝ詩文に見ゆる所であるが、果して海東と同一視し得るか猶ほ後考に俟つべきであらう。

右金吾嬾真子とは當時右衛門督たり、巨川居士とも稱して五山諸

僧と交遊淺からざりし山名時熙として知られてゐる。眞愚稿に

奉和嬾真居士宿直鹿祠詞下有感作(九九頁)

依嬾真居士遊西山詩韻末二首(九九頁)

和嬾真居士青陽馬上勝遊之作(一〇八頁)

次巨川居士遺鹿苑院殿畫像於惠林院韻(一三七頁)

次巨川居士賀新圓應無文禪師韻(一三七頁)

雲壑猿吟に

和韻寄山名源右金吾(六五頁)

いづれも七言絶、之を以てその贈投の明かな證左としうるが、今茲

原 寸

原 寸

にその人の七言絶一を傳へ得て、而も上邊二行に互り共に四言を缺くのを憾とする。又或は署名下に印記ありとせば之も缺損に委せられてゐる。

關西梵章に就いては今その傳を知り得ない。關西の號は猶ほ鄂憲

惠藏、惟忠通恕の用ふる所その出身地たる筑紫を意味する。署名下には長方形角入及び方形共に朱文の二顆をやゝ重ねて捺し、印文は判讀し難い。

惟肖得巖の七言律には中間右邊より紙損があり約三字を缺くものと思はれ、後敍にあつては第三行下端二字、第五行下端二字を缺損してゐる。敍文末尾に「余既寫四韻其下、叟索填紙空處、漫題云爾」

原 寸

とあつて四韻の指す處は先の七言八句としては當らざる如く思はれる。尙ほこの文よりして署名「岩又書」は得岩再び書すの意明かである。岩一字の稱呼は禪僧間に通途ながら、例を索れば鴉巢集「岩惟肖住栖賢」(二六頁)の山門疏、同じく「惟肖住栖賢」の諸山疏中

「起竜峰前表率、惟肖、岩公禪師於少林精舍中」(三一頁)を見られる。

その文集に東海瓊華集あるを知られてゐるが、刊本なく茲に參照し得ないのを遺憾とする。寂年不明、永享六年七十五歳と知られるが、現存應永年間の詩畫軸中溪陰小築、初秋送人圖にあつてのみの題贊を見ない。降つて永享年間には、自身の癸丑(永享五年)の年記ある聽松軒圖(國華三一六所載)おなじく乙卯(永享七年)望海樓圖(美術協會貴重品調査報告所載)蘇東坡笠履圖(東洋美術家寶集一下所載)の題贊を残してゐる。この三者にはその號蕉雪を用

ひて署名してゐるが、この山陽を冠するは生國

を意味し、應永年間のものには普通である。

印文はすべて「惟肖」二字を用ふるが、朱文及び白文の兩者を傳へる。之は方形朱文でありその一つの型に就いての資料として缺き得ないものである。

謙岩原沖の五言絶と惟忠通恕の七言絶が上下に配置せられて居るのは他に見ない珍しいものであるが、殊に原沖の詩を隸書を以てするのは題字以外にあつては稀有の事に屬する。他には傳蛇足筆對月圖(尙美資料八―三所載)に於ける奇獸子王政、犢農筆布袋圖(群芳清玩八所載)石川丈山の贊詩を見るのみである。おそらく原沖が

その得意を以つてしたものと思はれる。北野原沖と署名するのは夕佳樓圖贊にも見え、溪陰小築圖にてはその號「羅雲山人」を、三益齋圖にては「洛下」と冠する。北野といひ洛下といふのはその居處

を云ふものであら

うか。朱印方形白

寸 文一顆印文二字右

原 方「中」と讀まれ

るが左方は判じ難

い。普通に「謙岩」

の二字印を朱文或は白文にて用ひるに對し此の印記は特異である。

惟忠通恕の詩文集に雲壑猿吟を傳へるが、この七言絶は載せられてゐない。「河東」に就いては前述太白眞玄の場合と同様と解せられる。方形白文朱印「白云山人」はその齋名を白雲丹壑と云ふに一

寸 原

致する處であり、尙夕佳樓圖贊に於ても見られる。下方の方形朱文印は下邊を缺くが通字を認められ「通恕」と讀まれるが、他の詩軸にあつては方形白文「惟忠」を捺し、之を見ない。

鄂隱惠養、詩集に南遊稿を存し此の七言絶は「題芭蕉秋雨圖」(二八頁)として收録せられる。關西の號は先に梵章に於ても見る處、又西胤俊承も冒す處であり、後者の眞愚稿に「喜鄂隱上人見訪詩并序」

(七五頁)に

關西鄂隱上人、與余同鄉同門、而其志亦同

とあつて、蓋し同鄉同門の謂であらう。一寺を指すものと解し得な

原 寸

いまでも郷國筑紫を以て考へらる處である。方形白文朱印の四字は左邊切れるも夕佳樓圖贊に於けるものに參考し「僧惠養印」と考へらる。下方に尙ほ一印を存するが紙の斷爛に僅か朱痕を残すのみであるが、瓢鮎圖、夕佳樓圖、初秋送人圖の例に據つて解すれば方形白文「鄂憲」と思はれる。

北海彦軾については今知る處がない。印款又存せず、次の梁需が

此の詩に
正しく次
韻するこ
とに依つ
て、その

原 寸

着筆の關係の密接なるを推しうるのみである。

梁需はその頭書「朝鮮國奉禮使通政大夫禮曹左參議集賢殿學士」

とあつて足利義持の將軍嗣立に奉祝の爲來朝せるものと推定せられ、又岐陽方秀の不二遺稿に應永十七年秋八月廿六日の日附ある「與朝鮮國議政左右政丞書」(下三頁)の此の人についての記事を存する。

原 寸

「遊龍山僧舍次韵芭蕉圖」と題してその着筆が龍山即ち南禪寺に於けるものなる事が知られる。「永樂八年八月日」は得巖の「庚寅季夏」に年を同うし、やゝ遅るゝものと解せらる。印記二顆、何れも朱文の痕を認めるが、左邊切れるのみならず全體に紙面やつれて不明である。

玉畹梵芳の書は右邊よりかなり甚しく剝落してゐるが、行體四行に互り約四十字五言律と推せられる。第一行渠字右上側に僅かに朱痕を存し、遊印と思はれ、その書はこの行に始まることは明かであ

原 寸

る。印は他の詩軸に用ふる處は白文「知足軒」を以てするのが普通でそれ以外のものを見ない。之もおそらくその印の一角をのこすも

のであらうか。

梵芳は畫蘭の名手として聞え又書に善く、現存應永年間の詩軸にして初秋送人圖を除いてはすべてにその着筆を見る。當時禪林の尙好に對して最も關係深く最も秀れた一人である。

「散人梵芳」と署名するのは、溪陰小築圖に見え柴門新月圖敍には散人玉畹子梵芳と在る。猶ほ三益齋圖敍に玉畹子梵芳、柴門新月圖詩には「蚌星梵芳」とあつて必しも一貫するものでないが、散人と稱するのは、その傳に相應しく解せられるものである。

印記方形白文「玉簪」は他には柴門新月圖敍及び詩、鹿王院蘭石圖(國寶全集七所載)に見える。方形白文二字印には「玉畹」も用ひ、瓢鮎圖、溪陰小築圖、三益齋圖、江天遠意圖初め多く畫蘭にも捺されるに比しては、その印影の現存するものの寡い一例で、柴門新月圖、三益齋圖に見ゆる方形朱文の「梵芳」印又蘭畫に見ゆる方形白文「少林」印などと共に、梵芳の印記として研究せらるべき一つの型の標準と考へられる。

原 寸

西胤俊承の遊印「白雲松下」は夕佳樓圖にも見え、蓬萊山圖(おそらく模本)の署名には白雲松下と署するのを見、又晩年退居の雲松軒號とも脈絡するものであらう。關西の號は既に惠齋の條に述べし如くその出身を意味する。夕佳

樓圖に於いて同じく、晩年の着筆と推せらるゝもの江天遠意圖には雲松老衲と署する。

此の印記白文方形「江風山月」と推讀しうる四字は、俊胤の賛には珍らしく、知らるゝものとしては唯一である。他は瓢鮎圖初め方形重廓朱文「西胤」を用ひ、夕佳樓には猶ほ方形白文「眞愚道人」

原 寸

を併せ捺する。

遺稿眞愚稿には現存詩軸の賛を殆んど收載、この七言絶は「題芭蕉秋雨圖寄故人」(一〇〇頁)の題下に收録し、第二句鐙字は燈第三字は照、第三字閑字を閑、第四句鬢字を髻としてゐる。

前述「江風山月」の如く四言句を一印に成すもの、前述太白眞玄の「玉芝弋枝」があり、猶ほ嚴中周噩の「白沙翠竹」が此圖に見られる。

他の詩軸にあつては、夕佳樓圖後序に於ける仲方圓伊の「梅廬□□」初秋送人圖の周曼の「□山清雨」宗釋の「清月□□」と判讀せらるゝものがある。實にこの時代に近き他の詩軸に於ては、傳周文山水圖(後素遺芳四二)に於ける愚極禮才の「西湖風月」懶雲翁(南英周宗或は嚴中周噩)の「唯心務白」の如きものを見出す。かくして當時禪僧間の尙好の一端として知らるゝものである。

嚴仲周噩の遊印「□筠軒」の第一字は縁に近いが、眞愚稿に「和能宗喝食縁筠軒詩韻」(八七頁)と見ゆるに徴して熟語としては縁筠軒

原 寸

として解したい。天府の號は初秋送人圖にも見え、江天遠意圖に於ての懶雲叟とは別途の意に用ひたものと思はれる。傳に笑府と號すと云ふに似てその異同を知らず、

又天府とは如何なる意か後考に俟ちたい。

「釋氏周噩」の方形重廓朱文印は夕佳樓圖賛、初秋送人圖にも見え、他に見ゆる「嚴中」方形白文印と併捺せられてゐる。

原 寸

「白沙翠竹」の方形朱文印は現存のもの、唯一と思はれ、前述の如く周噩にとりての尙好の句であらう。直ちに杜子美柴門新月詩にちなむものと想到せられる。

以上一軸に纏められた題贊の外、紙の下邊に「永□小窓殘燭□□」とある斷片と仲方圓伊の敍及詩を存する。前者には纔か印影の朱痕を残すも何人か知り得ないが、二行に互りおそらく十八字詰と解せられる。

仲方圓伊の敍及詩は上邊や、四字の長さに又中間二ヶ個處を缺損し、その敍文現存四行に止まらざる如く推せらる。今この敍詩をそ

の遺稿懶室漫稿に見ることを得ず、この一文も文脈を辿ること難いながら、漫稿に多く見る詩畫敍と相並んでその一を加ふるものである。詩は二行に互り上邊各四字を補つて七言絶と解せらる、懶室はその號、夕佳樓圖には「懶室」を以てする。印は方形朱文「圓伊」と方形白文「仲方圖書」を用ひ、すべて夕佳樓圖後敍には見られないものである。

「仲方圖書」と使用するのは、瓢鮎圖に於て叔英宗播の「叔英圖書」との例を見出すのみであるが、全く軌を一にするものである。

大體これらの題贊は、縦横の罫線を以てその文字を劃せられて、十六字一行のものと十八字一行のものがある。山名右金吾、梵章、彦軾、梁需（十七字）圓伊、名不明のものが十八字一行の一群として考へられ、他は十六字一行の罫上に或はその野あるものと同一紙上に書せられる。この二つの關係が或は紙繼ぎに關するものと考へうるが、必しも斷定出來ない。昌宣の詩片がめぐりとして存在した時、その詩は字數不定に書かれてゐるが一方に十六字罫を劃し他方には名不明の詩が十八字罫に相當する大きに劃せられてゐるのを見、各人によつて決定されたものと思はれる。

唯得岩敍と同一紙なる原沖、通恕、惠齋の分と、梁需及びその次韻したる彦軾がその年記の示めす處に隨つて若干の月日の隔を存すると考へることは可能である。又山名時猷が

客枕驚使人一夜最多情

と詠するは梁需に對するものとして、圓伊と共にその位置を彦軾、梁需に近く考へうる。

この圖に對する敍は前述の如く三を以て數へられる。それらに就いてこの軸の由來を索むれば、眞玄、圓伊の文は完全せず、得巖の文又難讀のものであるが、眞玄敍の劈頭

龍山。華。

とあつて、之に就いては得巖敍終より第二行

一。華。年少諗以喻焉

圓伊敍第二行

華。上人有秋雨芭蕉句

と相通するもので一華なる人を龍山即ち南禪寺の僧と考へ得る。猶、眞玄の鴉臭集に「寄桃源故人詩軸序」（一六頁）中に

應永甲申夏、有客袖一鉅軸、徵敍于余、展而觀之、乃相陽巨福林

一。華。率嘗在輦下所與游者、寄桃源故人一雄尊公之詩也

とあつて甲申即ち應永十一年で、この軸の年記に先立つこと六年であり、おそらく同一の人と推定せられる。而して得岩敍第三行より

第四行に

繪事。同志者。於詩寄焉

圓伊敍第四行に

情好最厚者圖。之

と見え、先の「華上人有秋雨芭蕉句」に次ぎ、一華の詩ありて夫に因みこの圖が作られ、又多くの交友が之に詩を寄せたと思はるゝもので、この順序は多く當時の詩畫軸の夫に類して異ならざるものである。

而して、梁需が「遊龍山僧舍次韵芭蕉圖」としての着筆はその字義通り南禪寺に遊び請はれての作詩と思はれる。季夏の日付ある得

岩敘第一行に「然一展視之」とあつて圖は既に存在したものであり、梁需に關してこの作畫の動機を見出すものと考へることを避けたい。要するにこの圖が應永十七年季夏（六月）以前に成りしものなることを云ひ得るに止まる。

應永年間の詩軸として、之は明かに瓢鮎圖と溪陰小築圖間に位置せしめられるものであるが、その題贊の體裁から云へば後者以下に庶幾い。瓢鮎圖にてはすべての點で劃一的でありその着語の内容も亦法語的であるが、之は形制は勿論に多樣であり、詩も抒情的であり豊富な感情が盛られる。而してその書風も自由であり、例へば前述原沖の隸書の如き、楷書を善くすと傳へらるゝ惠藏の夫の如き、或は梵芳の行書の如きを茲に見うる。殊にこの梵芳は諸家の間にあつて特に流麗の感に嘆賞を吝み得ざるを感せしめられる。印影に關しても諸家の尙好をよく反映してゐるなど、かゝる特異な而も自由な態度は後來のもの、次第に形式的に流れやうとするのに比して清新さをより多く有するの感せられる所であらう。

要するに此の題贊のみとして他に伍して自ら幾多の特異な點を有して、尠くとも當時詩畫軸の研究に資すること多きを否み得ないものである。

此の圖の主題たる芭蕉に就いては、これらの敘及び題詩が各々の眼點から敘述し吟詠してゐるのを姑らく措いても、當時愛好せられ又實在せるものなることを次の如き例に依つて知り得やう。溪陰小築圖太白眞玄敘は

詠梅藥於炎天者簡齋之神妙也

畫芭蕉於雪裡者摩詰之天機也

皆得之於心而相忘於物也

との文に始まつてゐる。かく禪機として解するものに限らず、雲壑猿吟には

盆蕉（四二頁）

爲怯山庭秋雨寒、芳心託器未摧殘、安能不借王維筆、嫩綠莖々帶雪着

吊芭蕉（三一頁）

每吊芭蕉夜雨餘、翠殘半敗倚庭除、從今日日凋零去、秋後豈供懷素書

喜雨（五七頁）

秋聲怪底響芭蕉、聽到三更轉寂寥、爲有蒼生憂稼穡、旱天雲外倒

天瓢

眞愚稿には

春庭移蕉苗（八二頁）

移得蕉苗傍砌邊、半和殘雪半和烟、老來漸覺閑愁少、宜向秋窓聽雨眠

これらの詩が眞玄の文に比してはより抒情的であり、又芭蕉そのものに即して觀照的でもある。而してすべての詩が秋雨に云ひ及んで芭蕉葉を敲つ音に對する印象が深くその人々の生活感情に結び付けられてゐるのが見られる。

得巖が老年その號を蕉雪と云ひ、又次の時代の人ではあるが、桃源瑞仙が蕉雨と號したのも、かゝる心情から出づものであると解せ

られる。

此の圖の題詩もおよそかゝる領域を出づるものに非ずして、齊しく沈潛する心情に終始する。かく芭蕉なる事物を核心として描出さるゝ美的心象は當時にあつて或る普遍さをもち感銘を呼起すものであることが知られる。

詩にあつては内省的にその心情を唱ふ處、畫にあつては芭蕉を中心に一山水を展開してゐる。夫は恰も瓢鮎圖が提瓢の人物を中心とする山水畫である場合に似てゐる。而も山水畫としては一層純粹であることは溪陰小築圖等に庶幾い。手法も亦、瓢鮎圖が圖様に於て軽く、筆致に於て鋭く、如拙畫として獨特の風格を持するのに比すれば、之はむしろ溪陰小築圖等に類して考ふべきものであらう。その布置の小局面ながら錯雜し、筆致の潤含多きは、やゝ重苦しき畫面の印象をのこすが、整美せられない稚拙なものとしての善さは見逃しえない。

圖にも處々に剝落を存するが、入墨は尠くない。明かに下邊の切れて詰れる事は圖様よりして推せられてゐる。

圖の中心たる芭蕉は細勁な勾勒を以つて輪廓葉脈を描き、濃淡の墨暈を以て葉の表裏、或は他葉との區別を描き分けてゐる。しかし必ずしもその墨暈は嚴格に各葉の表裏に従つて行はれるものではなく便宜的にすぎない。

夜雨を表はすのには、吹き墨を以てし、この芭蕉及左邊柳梢の邊に大膽にその痕を残してゐる。この手法は殆んどその例を他に見ず、全くこの軸に特有なものであるが、その技法の系統も今知る處がな

い。

屋宇について格別の特徴も認められない。

松樹の梢枝は柳梢と同じく勁直な筆致で描き、その姿態は直立的で特別な傾を示さず、この點は溪陰小築圖の樹木の味に似て稚拙の感をもつ。車輪の松葉は墨染の上焦墨を以て描起しその筆致も聚密で他に見ない。屋後勾葉樹の描法は細かく手馴れた手法で溪陰小築圖の夫の一々にくゝるものと異つて叢葉の感をよく出してゐる。

水波も亦此圖にあつて獨特であらう。殆んど點に近く、他の圖のゆるく繞る描法と區別せられる。

山坡は斧劈峻處々岩頭を白く抜くのは、溪陰小築圖にも見られるが之にあつては峻法が明確ならず、點苔はやゝ大に、豎に強く打たれ、その老大な主山の布置をなすのも溪陰小築圖に於けるものとは全く異なる。

松樹間に見ゆる竹は介字點に近く、柴門新月圖の夫の潤ひある筆致のものとは別途のものであり、沒骨樹林の中景煙霞に中間を消すあたりも此圖の特色あるものと思はれる。

この圖にあつてその獨特の手法、勁直にしてやゝ味なき筆致、錯綜してやゝ纏まらざる構圖には、詩に謠はれた心情の筆端に潤出しているものではない、よし通恕が「水蕉繞砌兩三莖」と詠出する趣はありとしても、梵芳が「無端幻雪花」と云切る邊は到底見られず、惠藏が「曉來翻似莫愁人」とのはつきりとした仕上げ方も、眞玄の「一滴秋霖一滴愁」とする浸透した味ひも見られない。得岩がその敍に

蕉之與雨本無聲、況於圖乎、其鳴何自而發焉、然一展視之、秋灯對床、夜雨敲葉、如彈廣陵之清散、如摻漁陽之壯槌、已隱然盈耳矣

と云ふ所、圖に對し多くの詩的情緒を補つてその藝術としての効果を明確ならしめてゐる。唯その粗々しき筆致、殊にふき墨の雨點は通途に考へらるゝ刷毛書と異つて、こゝに夜雨敲葉と云ひ、その詩に「初霄枕上胡琴抹、后夜□□羯鼓忙」と疊んで律動的な暗示に感情の逼迫を誘ふの前提を成すものと云へなくはない。

之が芭蕉夜雨を主題としながら、而も特殊な筆致によつて繪畫的ニュアンスを醸すこともなく、單にその環境の説明的な山水の骨格的な描寫であり、一般に芭蕉夜雨の想念と相俟つて、多くの題詩に見らるゝより高次的な藝術的完成の素因を提供するに止まつてゐる。この立場はおそらく詩文に誘導せられた應永の山水畫軸として已むを得ざる成行であらう。この意味では、宋元山水の完成の度合に比して之が甚しく低い程度に於ける繪畫統制であることを否めない。

要するに、詩的にその形而上的想念を背景として、視覺的捕捉は第二義的に行はれて提示せられた山水畫である。この繪畫意識は後世文人畫と云ふ處に一致するもので、梵芳が「却愛輞川筆」と云ひ、眞玄が溪陰小築圖跋に「畫芭蕉於雪裡者摩詰之天機也、皆得之於心而相忘於物也」と説く立場に出づるものであらう。蓋し文人畫の祖宗としての王維に言及ぶ事再三であり、自らこの圖が南宋院體の山水の法式を追ふものながら、既に元明の山水畫の意識を模糊としてゐるが受けてゐるらしくその情緒に和らげられてゐると思はれる。

この大陸とはや、齟齬した結果は、おそらくこれらの製作の一つの地方色を形成する理由であらう。

此の圖の製作がおそらく京都禪林にある事は否み得ない。しかしその特殊な他に見ない味ひ、やゝ粗々しい感情をもつことは、從來朝鮮畫風として解せられてゐる。

梁雷の來朝を機とする製作とするのは、前述の題贊の關係から肯定し得ないまでも、朝鮮修信使が畫家を伴ふのを例とし、又その數多きことを推せられてゐる。時代を下つて金明國の例を聽竹畫史に見、特別な吹き金の技術についても記述がある。

この關係の逆な場合に就いては、李朝實錄世宗卷二十三、六年正月壬寅（應永三十一年に當る）の條に

賜日本國王使臣圭籌等餞宴于禮曹

圭籌梵齡求所持山水圖及道號贊與詩、直集賢殿魚變甲作山水圖贊

曰、

層巒萬仞流水千回雲嵐樹梢樓閣巖隈隱映出沒方壺蓬萊上人意匠迥奪天機模寫之妙莫究其微嗚呼豈所謂觀摩詰之畫畫中有詩者歟

直集賢殿俞尙智山水圖詩曰

烟水雲山淡又濃 參差樓閣樹重々 盤回石徑無尋處 轉入岩曉

第幾峰

集賢殿校理俞孝通詩曰

有客來携山水圖 乍看無乃寫方壺 層巒隱見雲千疊 古寺微茫樹數株

集賢殿副提學申檣詩曰

樹林翁鬱蔭層樓 萬頃波頭一葉舟 絕壁遙岑相隱映 看來却訝
在丹丘

集賢殿直提學金尙直竹軒詩曰

地僻居仍靜 開軒對竹林 自將清瘦態 不受雪霜侵 月上篩金
色 風來戛玉音 高師遣有相 讌坐樂無心

申檣梅窓詩曰

玉蘂嬋妍冒雪開 清標宜作百花魁 歲寒心事唯相識 唯有高人
出定來

魚變甲雪庵詩曰

雪岳凌空聳幾層 庵中面壁一高僧 神清骨冷心無累 不瞰人寰
熱腦蒸

集賢殿副校理安止畫觀音讚曰

蒼灣一曲 翠壁千疊 素衣真相 淵澄月白 身在於斯 心則無
着 於諸衆生 發苦與樂

とあつて、當時詩軸の形制は彼我にあつて共通なるものと知られる。
而して繪畫史的交渉はその頻繁なるを推せられるが、的確にその影
響を區別すべき標準をもたず、漠然たる相互關係を認むるに止まる
ものである。

今、朝鮮畫として考へ得らるゝ絶海中津贊山水圖（國寶全集二三
所載）は時代として此の芭蕉夜雨圖に近いが、その手法は全くに異
るものである。

猶ほ、朝鮮人の着語あるものと思はれる傳周文虎溪三笑圖（淺野
家寶繪譜所載）前述の對月圖、傳雪舟山水圖（東洋美術大觀四所載）
の如き二三の例を索ねてもこの芭蕉夜雨圖とはやゝ時代をことにし

て、要するに前述の彼我關係ありし證據として以上に提言するもの
ではない。この問題は更に幾多の資料と研究を俟たずしては決定し
得ないものであらう。ともあれこの杜撰な捜査は姑らく措いて、芭
蕉夜雨圖が應永間にあつてその着語の諸家の關係より見た報告に止
まつて擱筆したい。

附記 詩家の傳記は上村觀光氏五山詩僧傳、引用文集は同氏五山
文學全集第三輯所輯に據る。頁數はその第三輯各詩文集に於けるも
の。